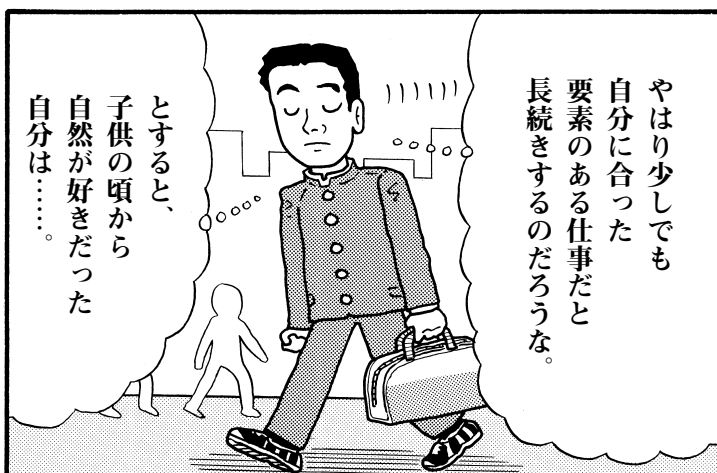
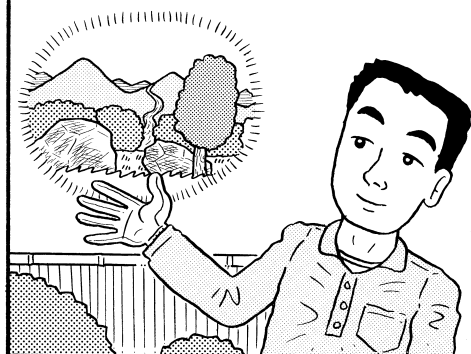


第41話 自然を相手に 仕事をする者として

平成15年度秀作入賞 木村 友洋さんの作品を
もとに脚色を加えたものです。

画 しあざき のぼる



とすると、
子供の頃から
自然が好きだった
自分は……

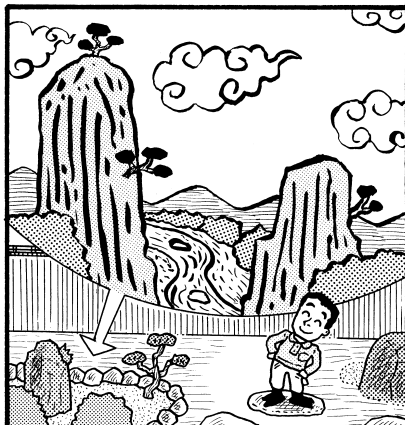
やはり少しでも
自分に合った
要素のある仕事だと
長続きするのだろうな。



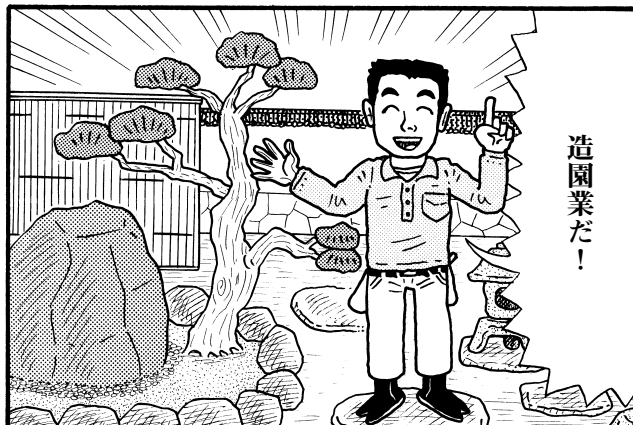
進路
どうするんだ。

うーん。

自分は昔から
造園の仕事しようとして
考えていたわけでは
ありません。



勤め始めてから
知ったのですが、庭というのは
自然の山や川を
小さな空間に凝縮した
もののようです。



造園業だ！



それは
木です！

ものを言わないから
相手にするのは簡単
だろうという人は
木と接したことが
あまりない人かもしれませぬ。

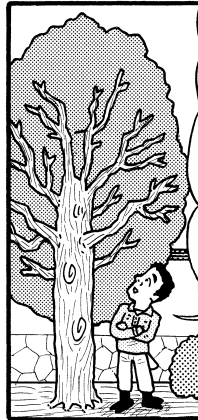


接客や営業の人は
人を相手に仕事を
します。

庭師もお客さんを相手に
仕事をするわけですが、
相手にする存在が
もう一人います。

何も言ってくれないということは
こちらで読み取る必要があるのです。

例えば植物には
何十種類もの病気が
あります。
人間なら言葉で
症状を伝えますが
木はそうはいきません。



全体の印象、
葉の色、幹の状態や
時には枝を落として
調べ、病気の種類と原因を
見きわめます。



原因をつきとめると
それに合った対処を行いますが、
うまくいかないこともあり
自分はまだまだだと
反省しています。



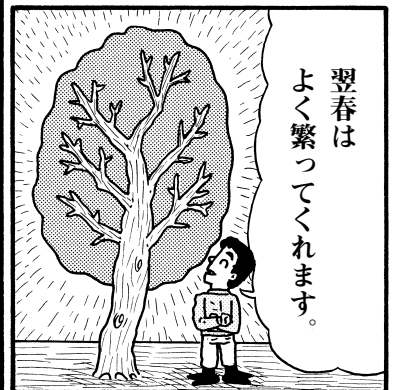
いろいろな家の木を
剪定させてもらい
経験を積んでいます。

木は本当に正直です。
対処が合えばひどい状態でも
元気になりますし、
駄目な時はすぐ枯れます。

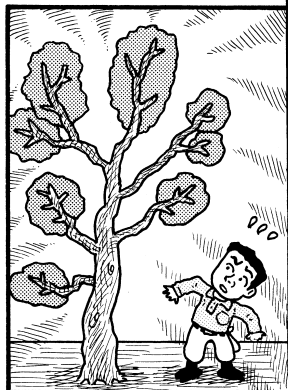


また、ていねいに芽をたくさん
吹かせる剪定をすれば、

翌春は
よく繁ってくれます。



逆に雑な仕事を
すると
次の年には雑な
枝ぶりになっています。



本当に気の抜けない
相手です。

だからこそ
毎日相手に
していても
疲れず
気持ちいいのかも
しれません。



剪定という作業は
たくさん物を減らして形を
作る作業ですが、
ない物に加えて形を作る
仕事もあります。



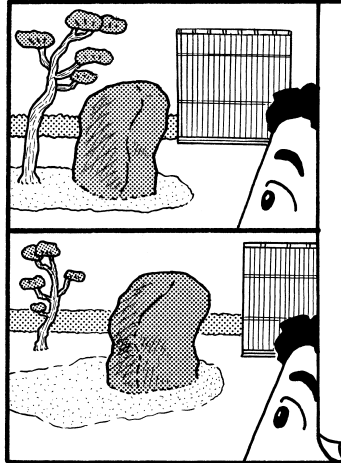
それが庭作りです！
造園業の本業です！

何よりセンスが求められる仕事で
持って生まれた才能だけでは
どうにもなるものではないと
思います。

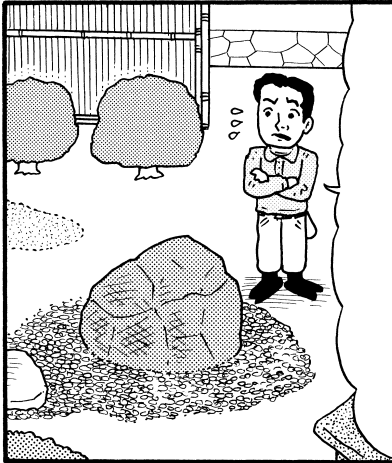


人の心を落ち着かせる、
山の風景や川の流れを
切り取って何も無い空間に
表現するのですから
大変高度な技術です。

一例をあげてみますと
石にも木にも
別の角度からの
別の表情というものがあり、
それぞれのどこを手前に
向けるかで全体の
仕上がりに変化が
出てきます。



小さな空間なので
何十センチ、数度の角度でも
大きく違ってきます。

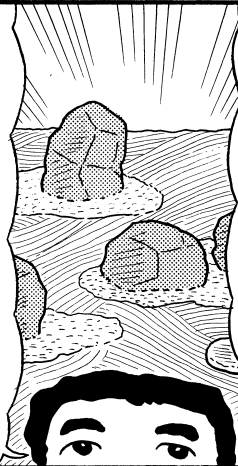


人工的なものではありませんが、
人工的に見えないように
自然な感じに仕上げます。
目標は本物の山や川の
風景です。



人間の目に
落ちていて見える角度や
石の並びがあるようです。

また庭の中の
さまざまな制約があります。
何百年もかかって創られてきた
制約なので、本当に理にかなって
いるといつも感心します。



人の目というのは本当に
正直に物を見る
もので、
何センチかのずれや
最も落ち着く角度に
石が収まったかを
判断してしまいます。



もちろん人によって
判断に違いがあるので
他人の意見を
取り入れることは
大事です。

この仕事をとおして
自分のやり方に
固執しないことも
学びました。



十人いれば十とおりの
剪定方法、石の伏せ方があり、
自分のが最高だと思うべきでは
ないようです。



この見方は生活のうえでも
いろいろ役立っています。

自然は本当に正直で
うそをつきません。
その中で仕事をさせてもらう
者の一人として
誠実に自分に与えられた
仕事を行なっていきたいと
思います。

